

宇部市文化振興まちづくり審議会 会議概要

日 時：平成 30 年(2018 年)12 月 26 日(水) 15:00～16:45

場 所：宇部市文化会館 2 階 第 2 研修室

出席者：委員 9 人(欠席 1 人)

事務局：末次副市長、庄賀観光・C P 部長、濱田観光・C P 部参事

安光文化・スポーツ振興課長

荒武文化・スポーツ振興課副課長

高下文化・スポーツ振興課副主幹

酒井文化振興係長、津室主任

1 会長及び副会長の選出

委員の互選により、会長を福田委員、副会長を廣田委員とすることに決定した。

2 宇部市の「文化振興まちづくり」に関する審議会の役割について

宇部市文化の振興及び文化によるまちづくり条例の制定の経緯から、文化振興ビジョンの概要や趣旨等も踏まえて事務局より説明。

3 議事

(1)「文化振興ビジョン」の進捗状況について

文化振興ビジョンに規定された、各種事業の進捗状況について、事務局より説明。

(会長) 事務局から 9 2 の事業についての説明があった。

事前に皆さん一読されておられると思うが、非常に多くの項目があり、本来は個々に事業量と質を評価しなければならないが、本日は重点アクションを中心に意見交換等を行いたい。

ビジョンの重点アクションがわかりやすく記載されているのが、11 ページの「まちじゅうアートフェスタ」、「にぎわいのあるまち」、「未来に向かうまち」の部分であろう。

文化芸術活動を行い、まちの賑やかさの復活も目指し、同時

に、未来を担う子たちのために、先を見渡していこうという展開になっている。

各施策には、目標指標が年ごとに設定されており、毎年進捗状況を確認していくということだが、各指標は目標達成が至上命題になることはないと考えている。

少々、未達成でも近史眼的に「だめ」だと、悲観することはない。

重要なのは、質的に目的に沿って適切な活動を行い、それが、良い効果を生み出しているかどうか、またはその可能性を高めているかだ。

そこについての議論を中心的に行う必要があるだろう。

なお、議事（２）の「来年度実施予定の事業について」と関連があるので、質疑や意見交換等は、議事（２）の後、まとめてしたい。

（２） 来年度実施予定の事業について

第２８回UBEビエンナーレ×まちじゅうアートフェスタ 2019(まちじゅうアートフェスタ)及び創造都市「現代芸術の国際展部会」開催について説明を、事務局から行う。

（会長） まちじゅうアートフェスタは、３回目の開催になる。これまで以上に、文化が日常に浸透するよう進化していくことを望む。

なお、現代芸術の国際展部会は、宇部市が主催して実施するのか。

（事務局） 主催は文化庁で、創造都市ネットワーク日本が共催して実施することになる。

今年、新潟市で開催された国際展部会は、新潟市の主催で開催された「水と土の芸術祭 2018」の会場を、国際展部会のオプションツアーとして参加者が視察した。

部会自体は、全国から自治体の文化芸術担当者やアーティストが、50～100人程度集まり、国際的な現代芸術についての議論をする。具体的には、講演会や各テーマに分かれた分科会の開

催である。

宇部での案としては、講演会や分科会は、文化会館等で実施し、第28回UBEビエンナーレを視察したいと考えている。

また、日程に余裕があれば、山口市の山口情報芸術センターを視察場所に加えることも考えている。

(委員) 現代芸術の国際展部会が宇部で開催されるのは、宇部をPRし宇部の文化芸術施策の振興にとっても、千載一遇のチャンス。

これまで、横浜や名古屋、新潟で国際展部会が開催され、さらに、近隣では瀬戸内国際芸術祭の関係で、香川県や高松市の取組が参考になる

このようなところを市の職員が視察して、各地の取組を視て、良いものはどんどん宇部に取り込んでもらいたい。

なお、「水と土の芸術祭2018」や、同じ新潟県内で実施されている「大地の芸術祭」などには、どなたか行かれたか。

(事務局) 創造都市ネットワークの幹事団体として、「水と土の芸術祭2018」を視察した。「瀬戸内国際芸術祭には、ビエンナーレ担当が、また、新潟の「大地の芸術祭」には、副市長を先頭に視察を行い報告会も開催した。

(委員) 人が喜び楽しんで、または悲しさを乗り越えながら、たくましく成長したりする。そういったことの積み重ねで、生活の質を上げるのが文化芸術と考えている。

宇部での国際展部会の開催によってその機運を盛り上げることに繋がると良いと思う。

私は、2006年に県内で開催された国民文化祭のとき、市内でインスタレーションを見て面白いと思ったのが、文化に興味を持つきっかけとなった。

今年は、大分で国民文化祭があった。皆さんも都合がつけば、どんどん出かけて行ってもらいたい。

必ず何らかの刺激を受けるはずである。

(会長) 私もなかなか各地の文化祭には行けないが、山口県の国民文化祭では関係者の一人として関わった。

その時に気を付けたのが、アーティストだけでなく一般の人が多数参加することだ

また、県の美術展覧会にも関わっているが、審査員はいわゆる「立派」な方が多い。

私は審査員ではないが、審査方針としてはできるだけ多く入選させるということをお願いしてきた。

出品者の意欲に敬意をはらい、また、参加するという意識を高めてもらうためにも、県立美術館の展示スペースに展示可能な限り、入選させてもらってきた。

絵が展示できないものは、例えば、出品者の作品を写真に撮って展示したりもした。

繰り返しになるが、皆が文化に参加することが一番大事と思うからである。

瀬戸内国際芸術祭には、学生を連れて見に行っただが、これは、色々なところでお金のかかるイベントのため、気軽に行けないという感じを受けた。

シンガポールのビエンナーレも見た。シンガポールでは、イベントもするが、アートが日常化している。街を歩けば、街のデザインやオブジェ、また道行く人の雰囲気など様々なアートを感じる。

なお、学習指導要領で教育の現場でも美術教育をすることとなった。

古くからの伝統美術と現代美術とを、両方学習するようになってきた。生徒も学ぶことが多くて大変だが、やはり、文化芸術にすべての子どもたちが触れる機会を保証していくという流れになってきていると思う。

(委員) 市民参加の話でいえば、2021年の市制施行100周年の記念行事には、文化に関する催しもあると思うが、これに是非、

市民が多く参加する必要がある。

市民がいかにより多く参加するかが、成功のバロメーターとなるのではないか。

(事務局) 今、市制施行の記念行事に、市民から約 80 事業の応募がある。是非、皆さんからの意見もいただきたい。
まだまだ時間があるので、ぜひアイデアをお願いしたい。

(委員) 先週の 22 日(土)に、市民大学環境・アート学部の研究発表会があった。
事務局の皆さんも参加されたと思うが、受講生の提案でアートに関するもので前向きで斬新なものがあった。
市民大学の研究発表内容も是非、記念事業の一つとして検討していただきたい。

(事務局) 事業案として取り入れられるか、内容を再度チェックしてみたい。

(会長) 気負って負担も多い事業だけでなく、気軽にできるものもあって良いと思う。
その方が、市民が応募しやすいだろう。

(委員) 全国どこでもそうだが、今、高齢者といわれる年齢層に元気な人が多い。
自分の趣味でも、ボランティアでも、特に社会貢献につながることであれば積極的に行いたい人が多い。
それが、文化活動であれば、市の文化の振興にも役立つので、是非、高齢者の文化活動を応援してもらいたい。
それと、文化事業の参加者を増やそうということなら、子どもを対象とした文化活動を実施すると良い。
高齢者は、孫が関わることには、何でも参加してくる。孫のためなら何でもする。
もちろん親もそうだ。親子一緒にできる文化事業をして、宇

部の文化レベルをどんどん上げるような仕組みを考えたい。

(会長) 県の美術協会でも、毎年、学校美術展、幼稚園、高校生の展覧会をする

展覧会には、親と祖父母が来て、県立美術館は大変な賑わいとなり、子どもたちも喜ぶ。

また、帰りに買い物をしたり、ごはんでも食べたりして、家族のだんらんになる。

ちなみに、県立美術館でイベントがあるたびに、山口市の道場門前付近の商店街は賑わい、経済効果も生まれている。

(委員) 先日まで、親子参加型のクリスマスケーキをつくる教室を開催した。10組募集すると親や祖父母が来るので教室が入りきれない状態になった。

私も、子どもを中心に家族で参加できる事業が良いと思う。

(委員) 宇部の子どもたちは、文化については先進的な環境にあると思う。

私の地元は県東部にあり、防衛関係の予算で施設面は大変充実しているが、子どもたちに対する文化事業の取組は、宇部は大変充実していると感じている。

また、子どもたちに「がんばれ」「きらめけ」などと掛け声をかけても、そうなるほど単純ではない。

子どもたちが頑張れる推進力は二つあると思う。

一つは「自己肯定感」、もう一つは「自己効力感」である。

また、学校には学習指導要領というものがあり、ほとんどの取組には、授業と関連しなくてはならない

そのような意味から、音楽の授業とタイアップした、文化創造財団の「アーティスト・イン・レジデンス事業」で、指揮者の松下京介先生に子どもたちに指導していただき 市の音楽祭に出演した。

おかげで当小学校は1位となった。

音楽の授業として本物の先生をマッチングしたことは本当

に良かった。

的確で面白い指導により、子どもたちは素直に声ので、かつ本番でリラックスする方法も会得できた。

松下先生の指導で、本校の児童は一皮むけたようだった。

また、北部で感じたことは、宇部市の教育方針や地域活性化の取組は、市域全体、地元全体に浸透していると感じた。

そのように思ったのが2件あった。

一つは、小野スイーツプロジェクトだ。

地場の店が、それぞれ工夫して商品をつくり小野の産品として売り出している。

もう一つは、地域の文化祭で見た、案山子コンテストである。市の事業として地域でやったものが、地域の文化祭にも広がっていた。

なお、文化芸術と学校教育との連携には、繰り返しになるが教科とのマッチングが必要となる。

音楽以外に、国語でいえば「短歌」など、図工なら「美術」などがコラボとして活かせると思う。

(委員) 私の学校は、学生は18～19歳が主体。高校生の延長でもあるような、社会にでる前の準備をしている精神面でも若者特有の期待や不安を抱えている世代でもある。

近い将来、私が担当している保育の生徒も現代芸術を受講する予定となっている。

保育を目指している学生すべてに「表現」する方法を身に付けてもらいたい。

園児に対しても、保護者に対しても、構えなくても自然でリラックスした形で、できるようにしたい。

また、様々な趣味を持っている学生も多いが、発表の場が学園祭などに限られている。日常、学生たちの表現できる場があれば良いと感じている。

「ふるさと学園」でも講師をしているが、最高齢は98歳であり、地域社会にはいろいろな人がいる。いろいろな場面で活躍できれば良い。

(副会長) 私の職場は、宿泊施設だが、最近の取組はアートがキーとなることが多い。

職場の敷地は広く、いろいろな団体からイベントや連携事業の要請がくる。

その中でも一番多いのがアートの相談であり、具体的には、美術展の開催などである。

皆さん、発表の機会がない。展示スペースがないなどと言われている。

文化事業を祭的にするのは良いが、もう少し、日常的にどこでも発表の場、鑑賞の場があればよいと思う。

(会長) 「かわいい」や「きれい」というものも文化。

北川フラムがそのような提唱をした。

日本の伝統的な食、器もきれいだし、粹、または、わび、さびなども、国際化すればするほど、残す価値のあるものだろう。

また、伝統も50年～100年単位で変わっていく

他の国を知れば知るほど、日本も古いものを大事にする。

数百年続いているものを大事にするようになるだろう。

戦後しばらく美術教育といえ、西洋のものばかり、米国、欧州のものが中心だった。

90年代に入り、我が国に伝統文化を学校で教えるようになり、「文化」のカテゴリーの中にも、音楽では「民謡」、絵では「浮世絵」などが入った

訪日外国人の間で、油谷の元乃隅神社がSNSを通じて話題になり、我々も初めて気づかされた。こういうことから、アートが日常化してきたと思った

日本の「食」もまさしく文化だ。

大変だとは思いますが、現代芸術の国際展部会では、日常のアートに関することをテーマに何か実施したいものだ。

(会長) 山口市の山口情報芸術センターについて、市の関係者にも話し

たが、未来ある子どもの教育のための事業にシフトすべきと思う。

世界の最先端の人を呼ぶよりも、市民の教育にもっと力を入れたらどうかと思っている。

(委員) このたび、法律が改正され、文化芸術振興基本法から「振興」が取れ、文化芸術基本法になった。

和食はユネスコに認定され、生活文化も明確に「文化」として位置付けられた。

宇部市の条例には花やお茶が文化と規定されており、先見の明があると思った。

また、文化芸術基本法では、文化芸術はさまざまなジャンルと連携すること、文化を観光、産業、国際交流、福祉などと有機的に連携することがうたわれているので、配慮しなくてはならないと思っている。

文化創造財団では、これまでアートマネージャー養成講座を2回実施、今年度からは、ワークショップリーダー養成講座を始めた。

昨今、子どもたちが外遊びや友だちと遊ぶ機会より、SNSなどに触れる時間が長いなどという問題があり、この問題を何とかできないかと思い、企画を考えた。

子どもの表現活動に的をしぼり、指導者を養成する講座で、先ほどの「自己肯定感」や「自己効力感」などを身に付けてもらえればと思う。

3年計画で実施、今年度は座学、来年度からは実践を考えている。

ワークショップリーダー養成講座の講師は、コンサートや観劇などの鑑賞も重要だが、最近よく言われる、社会的包摂が大事になると話されていた。

財団としては、会館に来られない子どもたちに、文化芸術に触れる機会を提供したくて、文化会館の近くの子ども食堂「みんなや食堂」に出向いて行って、ハーモニカや第九の歌、箏の演奏、また、ミニ演劇など、さまざま社会的包摂事業も行う予定である。

(会長) アートマネージャー養成講座は、大変よく勉強になった。

子どもたちへのワークショップは必要だ。

プラトン曰く「芸術を教育の基礎とすべし」とあるが、なかなかうまくいかない時代が多かった。

広く言えば、「お茶」とか「お花」の作法などは人間の品格を高めるのではないかと思う。

また、人間、死ぬときは、「心の中が充実して楽しかったな」と思えば幸せなのではないだろうか。

必ずしも美しいものでなくてはならないということもないが、それでも良いと思う。

文化の日常化、アートの日常化は、大きな社会の変革だ。「世界のエリートはなぜ『美意識』を鍛えるのか」という本がある。

経営においても「アート」と「サイエンス」が両立すると思う。経営者には美意識やモラルがいる。

(委員) 今更だが、私は、ビエンナーレ世界一達成市民委員会の委員の立場として、世界一の歴史を誇るUBEビエンナーレを、さらにテコ入れして、これを利用して文化創造をやっていけたらと思う。

世界で最長の唯一無二のものなので、これを活かさない手はない。

来年の現代芸術の国際展部会では、自信を持って全国からのお客様さんに、ビエンナーレを見てもらいたい。

ビエンナーレのノウハウの蓄積は日本一あると思うが、さらに、重点的に伸ばすには、他の地区を視察して良いところは取り入れなければならない。

「アイデアは移動距離に比例する」と言われる。フットワークを軽くして、ぜひ、全国各地の事例を研究してもらいたい。

また、先ほどの市制施行100周年のプロジェクトであるが、一つ提案したい。

現在、世界一達成市民委員会で絵画コンクールを行うことになっている。

小学校・幼稚園・保育園の児童・園児から、彫刻の絵を募集している。

来年は、ビエンナーレ本展に合わせて開催し、将来的には、中学生・高校生・一般まで含めて、彫刻絵画コンクールを実施したい。ぜひ、プロジェクトに加えていただきたい。

(事務局) 2021年は、ビエンナーレ60周年でもある。
市制施行100周年については 検討させていただく。

(委員) 本小学校では、3年生と4年生とが彫刻見学に参加している。
4年生は、3年生の時と同じ担当者が説明する制度になっているようで、子どもの成長に合わせて解説を行うなど、大変深い取組と思った。

見学はインプット、これからはアウトプットすることが大事。
彫刻としてだけでなく、今日我が国全体の課題でもあるが、自己表現が弱い。言葉でも文字でもよい。作品でもよい。

仮にビエンナーレを活用するならば、彫刻を見て感じたことを、文字、言葉、作品でも何でも良い。自分の考えが言葉で言える。何かで表現できる。

人間的にも充実するし、これからの時代、生きる力、国際競争力を子どもたちに持たせてやりたい。

(会長) 時間になりましたので本日はこれで終わりたいと思う。

アートを日常的に取り入れることで、我々の生活を豊かにしていくこと。特に、子どもたちに対し、アートに触れる機会をつくるのが非常に大事になってくる時代と言える。

アートとは日常であり特別なものでないというのが「文化振興ビジョン」の中でうたわれているので、そのあたりは皆さん同意されていると思うが、事務局もそれに従って各施策を進めていただきたい。

事務局から何か？

(事務局) 先ほど副市長が話をした、ガーデンシティ構想について、補足説明をする。

本日、記者発表をしている。

「緑と花と彫刻のまち」の字部で、緑と花がきちんと「まちなか」にあるように、市の施策としてこれから実施していく。

(委員) 山口ゆめ花博は、136万人の来場者があったが、ビエンナーレは、10万人を超えたことがない。

花の持つ魅力は強い。近い将来が楽しみである。

(会長) ガーデンシティと聞くと、シンガポールを思い出す
バランスよく、緑と花と彫刻を配置することを期待する。

追加の質問や意見がある場合、事務局へ連絡されるようお願いする。